水と文学 (14)

前東京都水道局理事　小泉　智和

お正月なのだから、何かおめでたい小説でもないものかと考えましたが、こと表題に関しては思い当たりません。

まあ、文学はどちらかと言えば、歴史物を別として、比較的、辛い、悲しい想い出を綴ったものが多い様に思います。

そんな中で、辛い、悲しい物語にもかかわらず、結構笑える、サクセス・ストリーがあります。

林芙美子の「放浪記」がそれです。

森光子が、この物語を舞台で演じて、好評を博し、1600回を記録しています。

筆者は、昨秋、林芙美子の故郷・尾道を訪ねる機会があり、また新宿で生誕100年記念“林芙美子展”に触れる機会があったのでこれを紹介しましょう。

○　林芙美子の略歴

芙美子は、明治36年（1903）11月、福岡県門司市（現北九州市門司区）に生まれました。（父の認知がなかったため、戸籍は母の故郷鹿児島県桜島となっています）

母は、キク（35歳）、父は宮田麻太郎（21歳）で、麻太郎は太物（綿・麻織物）の行商人をしていました。居を下関、若松と移し、石炭景気もあって、「軍人屋」と屋号を掲げた麻太郎の商売は繁盛します。しかし、芸者を家に囲ったため、キクは、旧正月の夜、同情してくれる店員の沢井喜三郎と７歳の芙美子を連れて長崎に出奔します。芙美子は、11歳までの間、両親の行商に連れられ、或いは親戚に預けられて、小学校は、佐世保、久留米、下関、鹿児島、門司、戸畑、折尾と転々としています。

大正５年（13歳）、一家で広島県尾道市に定住します。15歳、月謝を払えない身でありながら、どうしても女学校へ行くという気概を持って、市立尾道高等女学校（現・県立尾道東高校）の門を叩きます。そんな彼女ですから、入学して間もなく担任の先生宅へ出向いて、「先生、月謝を払ってください」と言って、月謝代を貰っています。

11年、19歳で女学校を卒業して、初恋の人、明大在学中の岡野軍一をたよって上京します。岡野は、卒業後、家族の反対で芙美子と別れ、郷里の因島に戻りま

す。芙美子は、この頃から日記を付けはじめたと言われ、それが「放浪記」の原型となっています。

関東大震災（20歳）で一時尾道に帰郷、21歳で、再び単身上京。色々な職業（帯封書き、風呂屋の下足番、株屋事務員、女給、行商、露天商など）につきながら詩や童話を書き、また数ヶ月間アナーキストの詩人と同棲した事もあって、文学生活が本格化します。

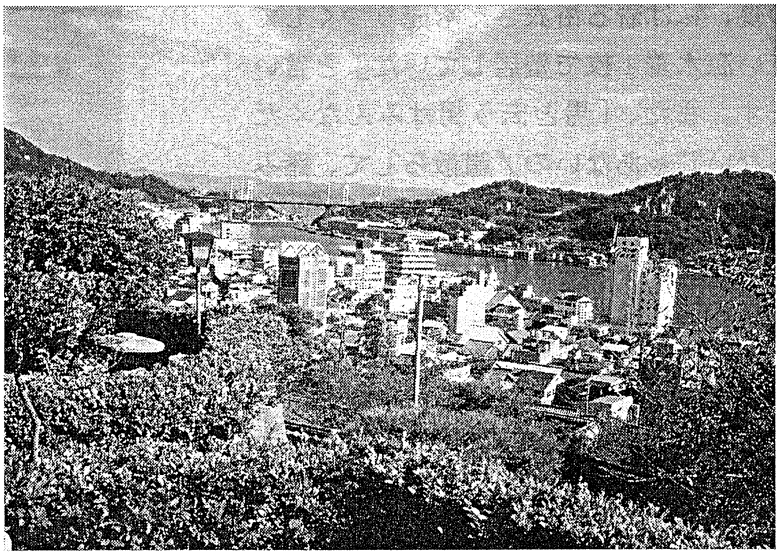
昭和元年（23歳）、世田谷から本郷に移り住み、洋画家の手塚緑敏と結婚。この年、尾道が舞台の「風琴と魚の町」を執筆。翌年、杉並区（「清貧の書」の舞台）に転居します。

昭和５年（27歳）から後は、ずっと妙正寺川が流れる落合（新宿区中井）が気に入り定住します。

同年、「放浪記」が発行され、ベストセラーとなります。以後、死ぬまでに、「うず潮」、「夢一夜」、「晩菊」、「浮雲」等多数を執筆しています。

昭和26年６月27日、朝日新聞に「めし」を執筆中だった彼女は、「主婦の友」の仕事を終えた後、深川でウナギを食べて帰宅します。就寝してすぐの翌28日、持病の心臓病の発作で急死、47歳の生涯を閉じました。

戒名は「純徳院芙蓉清美大姉」で、落合近くの万昌院功運寺（中野区上高田）に眠っています。



芙美子の故郷・尾の道

○　芙美子の放浪記

一切合切が、何時も風呂敷包み一ツの彼女の「放浪記」を、本の中から少し覗いてみましょう。

21歳の芙美子は、単身上京します。それからの３年は食べることも、生きてゆくこともやっとで、様々な仕事をしています。しかもこの間、幾度となく男に裏切られます。

しかし、孤独な若い女の生活苦、「花のいのちはみじかくて　苦しきことのみ多かりき」の中にも、彼女のしたたかさと楽天家ぶりが見えます。

生活ぶりは、「暑い陽ざしだった。だが私は、アイスクリームも、氷も買えない。ホームでさっぱりと顔を洗うと、生ぬるい水を腹いっぱい呑んで、黄色い汚れた鏡に、みずひき草のように淋しい自分の顔を写して見た。さあ矢でも鉄砲で

も飛んで来いだ」、そして、「昭和４年の夏、私は着る浴衣さえも売りつくして紅い海水着１枚で蟄居していた」と言います。また、「男と云う男はみんなくだらないじゃあないの！蹴散らして、踏みたくってやりたい怒りに燃えて、ウイスキーも日本酒もちゃんぽんに呑み散らした私の情けない姿が、こうしていまは静かに雨の音を聞きながら床の中にじっとしている。・・・私は宿酔いと空腹で、ヒョロヒョロしている体を立たせて、ありったけの米を土釜に入れて出て行った。階下の人達は皆風呂に出ていたので私はきがねもなく、大きい音をたてて米をサクサク洗ってみたのです。雨に濡れながら、只一筋にはけて行く白い水の手ざわりを一人で楽しんでいる」と、言った具合です。

そんな彼女の生活も、「放浪記」のベストセラーによって終わります。

その年の12月には、10銭玉を持って風呂へ行こうとした時、夕刊小説（東京朝日）の依頼が飛び込み、大馬力で書き大金を得ます。随筆の中で、彼女は、「暮の28日に貰った千円以上の金に、私は馬鹿のようになってしまって、イの一番に銀座の山野でハンガリアン・ラプソデイのデイスクを買った。天金で一番いい天麩羅を下さいと云って女中さんに笑われた。そして一番いい自動車に乗って帰ろうと思って、あんまりよくないのに乗って家まで帰ったのを覚えている。

家には、夫や２，３人の絵描きさんたちが居た。みんな貧乏で、お正月は支那そば会をしようと云っていた連中も、私の持って帰った札束を見ると、みんな“憂鬱じゃのウ”と云ってひっくりかえってしまった。

21歳の林芙美子
＊尾道市立図書館
「尾道の林芙美子」より

お正月はこの貧しく有望な絵描きたちを招んで、実に壮大な宴を張った。国には２百円も送ってやり「あツー！」と云う両親の声が東京まできこえて来たような気がした。両親は、私の書くものを一番ケイベツしていたので、その申しひらきの見得もありなかなか人生ユカイなものの一つであったのだ」と、語っています。

○　芙美子のこだわり

昭和５年、文士村と言われる落合に移り住んだ芙美子は、昭和14年土地を購入し、新居建設に着手します。新居への転居は、38歳の時です。

借家住まいを続けた芙美子にとって、家族と共にちゃんとした家に住むこと、とりわけ苦労した母に、ゆっくりとお茶を飲んでもらう部屋を造ることは、彼女の夢でもありました。

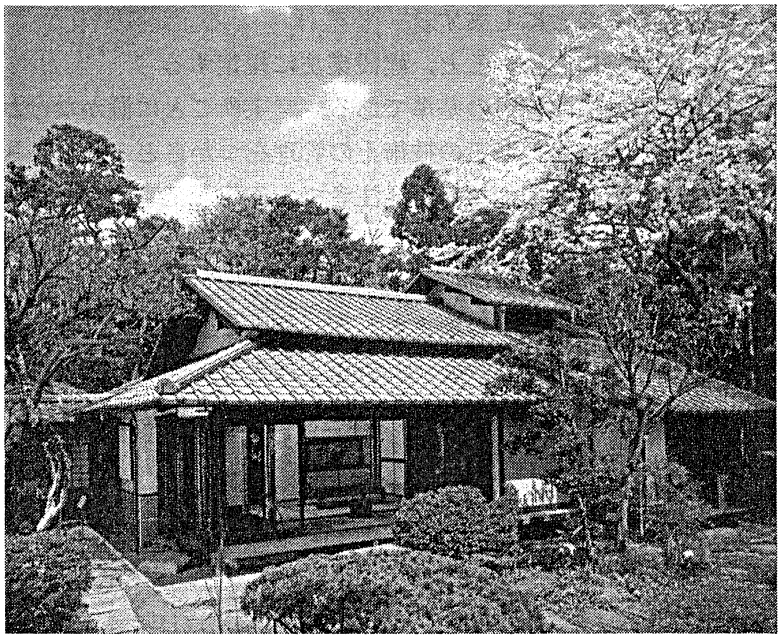
彼女は、家を建てるについての参考書を200冊近く買い求めて、設計者や大工を連れて京都の民家を見学に行ったり、材木を見に行くなど、その思い入れは格別でした。

設計の際に特に希望したのは、東西南北風の吹き抜ける家であることと、茶の間と水まわりにお金をかけることでした。

当時としては珍しい水洗便所、タイルの浴室を設け、そして国産第１号の冷蔵庫、撹拌式の洗濯機を設置しています。また、彼女が自慢にした一つに、人造石研ぎだしで造られた台所の流しがあります。

芙美子は、“台所をたいへん愛しています”と語っているように、家事が好きで、仕事の暇をみては家族の食事を作ったり、漬物を漬けたりしました。新しい客が訪れた時、手早く酒の肴を作るのが得意だったと言われています。

放浪の末辿りついた落合の家、芙美子にとっては、割烹着を着て、包丁を持ってジャガイモをむき、陽だまりの縁側でつくろいごとをし、洗濯、掃除をする、そんな当たり前の生活が何よりの楽しみであったように思います。



林芙美子記念館・新宿区